
テンプレート？夢のまた夢だよ

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレチート？夢のまた夢だよ

【Zコード】

Z0299BA

【作者名】

リョク

【あらすじ】

田覚めたらリリカルなのはの世界に？

明らかにチート転生者も居るし、こつちには用途不明のレアスキルに聖王の鎧にばれたら殺されるであろう（自分が）ユニゾンデバイスのアギト……。

これは主人公がチート転生者のオーリ主（笑）から逃げるお話である。

憑依先はクローン（前書き）

あけましておめでと「ひ」やこますーーー。
つーわけで新小説をーーー！

憑依先はクローン

何時も通り起きる、それが普通だった、だけど今日は体が重く、それで居て暖かかった。体が何か温かい水に浸かっている様な感覚、いや実際に浸かっているのだろう。

重い目蓋を開けるとそこは研究所だった、本当にそれしか言えないのが辛い…………。つかここに本当に何処？

「ゴボッ！？……ゴボ、ガボゴボ（こ）ッ！？……つえ、器官に入つた）

器官に入つたが大丈夫のようだ。

「ふむ、正常に作動しているな

「魔力も高い、成功のようだ」

目の前の科学者？みたいなのが喋つてゐるんだがよく分からない。本当にここ何処？

六年後、あ？話が飛びすぎ？じょうがないよ、僕ですから。

まあそんな話は置いといて…………僕は魔法少女リリカルなのはの世界に居るらしい。え？分からないうつて？まあ簡単に言えば僕はこの体に憑依したらしい。

その体は古代ベルカの王族のクローン、聖王オリヴィエのクローンらしいです。性別はちゃんと男です、女になつてたら自害しますコレ絶対。

まあ辛い訓練や実験は苦しいですが生きたいので何とか必死に生きています。

僕はヴィヴィオの成り代わりかと思つたんだけビニにはアギトも居たから絶対に違つて言う事だけは分かった。

そして僕はアギトのロードです、炎の魔力変換資質ですから使えます。

レアスキルは聖王の鎧以外にもあつたりします、実質一つです。ですが使いこなせるかと聞かれたら使いこなせません、自動でも無いですし時間も少しですがかかります、それにこれは魔力ではないです。

研究院達の話を聞いて分かつたのですが原作組、もとい原作キャラ達とは一応同じ年です、あくまでこの身体の身体年齢と同じなだけですが。それに原作には居ない人もいた。

オッドアイのイケメン野郎、それに一無限の剣製『Unlimited blade works』と詮づ名前のレアスキルが…………。

どう見てもチート転生者です本当にハイ。

で、どうかぬか……。

「とつ合へず脱走しようが、アギト」

「わかつたぜマイロード」

このままじやあ殺されるからね、明らかにハーレム狙いだし
アギトも狙ってるだろ？しどう……。

フラグは知らないところで立つ

あれから一年、脱走は上手く言つたと言えば上手くいった。前々から考えていた事ではあつたし計画は時間をかけて練つた。事実逃げ出せたのだからそれは良かったのだろう。

で、今は地球……なんで？

正解は地球の常識しか知らないから、お金についてもだ。

憑依前は純粹な日本人、それに何故か地球に惹かれる。

「よし！魚でも取るか！！」

「楽しみにしてるぜオウカ！！」

とり合えずバリアジャケットを着てモリを持つ、デバイスは単純な西洋剣だ。それを背中に携え海に飛び込む、春先の海水は肌を刺すように冷たかつたがバリアジャケットがそれを守る。目にはゴーグルを付けていたので海水は目に入る事は無く呼吸はバリアジャケットがカバー出来ている。

「（今日は少し遠くまで行つて見るか）

…。
思えばあの時あんな事を思わなかつたら良かつたんだろう……。

「よし、大量大量」

アミには大量ともいえる魚介類や貝類があった、これだけあれば三日は事足りるだろう。そして帰ろうかと思つたとき……。

「ん? 何だあれ?」

海のそこに光る何かが有った。

「もしかしたらお宝かもしれない」

実際にこの一年間はお宝を見つけることもあった、少なかつたとは言え質に入れ換金すれば大金にはなつた。言つてしまえば経験だ。

そう思いながら海に潜り、光る物の近くに行く。光るものの中には

綺麗な日本刀だった。

「(何だ、外れか)」

だけど外れにしては綺麗な刀だ、むき出しのままなのに鋆びてる様子が無い。むしろ新品のように光り輝いている。

「（まあ持つておいても損は無いだろ）」

そんな感じで触った。

その瞬間刀を中心に莫大な力の奔流が生まれる。

「『ゴボゴボーーー！』（やばつ……溺れる）」

急に海流が生まれその中に飲まれそうになる。
だが魔法を使い周囲を少しだけ蒸発させそのまま海面にでも。

「ふはーーー！」

すぐに体に溜まっていた二酸化炭素を全て排出し酸素を取り込む。

「ぜえ……はあ

息をしながら何とか自分のペースを取り戻す、魚や貝はちゃんと持つてきた。ただ明らかに原因である刀も持つて來ていた事には驚いた。

刀を手から離そうとしたが取れなかつた。

仕方が無く腕を切り落とそうと早まつたことをしようつてバイスの剣を背中から抜いた。このときの考えは頭に酸素が回っていなかつた為である勘違いはしないで欲しい。

その時、手から刀が外れそのまま剣に吸い込まれる、剣は形を変え先ほどの刀に変わつた。

「……一体どういう原理だよ」

そう言いながら僕は島に帰るのでした、マル。ちなみに今は無人島暮らし、ナレつて怖いね。

酷い事？お前が言うなーー！

「ケホケホ…………」

「大丈夫か？オウカ？」

あー、風邪引いた…………。原因は恐らく昨日の海流に飲まれた事が原因だろうな。あれから体中に変な力が渦巻いている、もう一つのレアスキルと同じ力だから恐らく体外に放出はできるだろ？

「…………今日は私が作るな」

「…………ああ、ありがと……アギト」

ああ、平穏だ。研究所暮らしが長かったからか今は平和が大好きだ、だけど何時までもここに居られるわけじゃない。

それに昨日の事もある、もしかしたらロストロギアの爆発とかになりそうだから…………。

アギトもこつちに居る、あの転生者からは命を狙われるかもしれない。

「そろそろ潮時かな」

寂しく呟いた言葉は誰にも聞かれる事無く、響いた。

「もう朝か……」

風邪はもう治った、力も何とか安定したものになつていて。そもそもこの拠点から離れないといけない。何時管理局が来てもおかしくない……だから……。

「…………本当にここで魔力が観測されたなんですか？」

外から声が聞こえる……同じ年くらいの女の子の声だ、その声の主は……。

茶髪のツインテールの少女だった。

他にも金髪ツインテールとかショートの少女とか……。

なのは、フロイト、はやての三人だった。

「最悪だな……」

「これが世に聞く」都合主義なら間違いなく神様を呪つてやる。

まああの銀髪オッドアイのチート野郎は居なかつた、それだけが救いだうつ。

「オウカ…………」

アギトの小さい体が震えているのが分かる、僕のこの体を作りアギトと一緒に実験していた組織は管理局だった。偶然見つけた資料で知つたんだ。

だからアギトは管理局を信じなくなつた、本来はシグナムの相棒になる筈だつた子…………。

僕はあくまで一割がそんな事をやつてるだけに過ぎないと頭の中では理解している、頭の中だけだけどね。

「大丈夫、逃げられるから

アギトを心配させないよう抱きしめる。

「でも、でも…………」

「大丈夫だから…………」

自分の体も震えているのが分かる。

「あそこに移動船がある、それに乗れば…………」

逃げられる、そう確信してもやはり怖い…………。

でも…………。

「逃げなくちや…………」

言ひ、言葉を紡ぐ…………「デバイスに名前は無かつた、それを書き換えられ新しくなったこの刀の名前を言ひ。

「アマノムラクモ、set up」

虹色の魔力が体を包み込む、バリアジャケットが構成される。バリアジャケットは綺麗な赤い着物に白色の羽織、足はシンプルな靴、籠手もあり以外に丈夫そうだ。

「走つて逃げる」

足から魔力を放出する、魔力は炎に変わり速度を上げる。

「おりやあーーー！」

洞窟から飛び出して海岸にあるもう一つの洞窟に置いてある次元移動船に乗れば良い。

いきなり飛び出したため三人に気づかれる、それでも逃げる。

「待つて！！」

高町なのはが僕を止めようと声をかける、だけ止まつてたまるか
……！

「待つてくださいーーー時空管理局ですーーー話を

今度はフェイト・ト・ハラオウンが田の前に立ちふさがる。

「い、嫌だーーー！」

素直にはつきりとそう言ひ、やう言つたときのフロイトの顔が少し泣いていたが気にしない！

八神はやては遅い、つまり

「うるさいやつだ！」

「ぐう！」？

誰！？—一体何！？

「全すべて、アリガトウセキヤがつて」

背中に足を乗せるのは赤毛の三つ編み……………守護騎士の一人ヴィー
タだ。

何でここに……ここで回りをよく見ればあの転生者以外全員居るじゃない……アンビリビーバボー！

「まあ待てヴィーター

ヴィータに声をかけたのはシグナムさん、ゴメンあんたの未来の相棒は僕の相棒です。

「おたひめんへいせ」

「ウニ」

「泣きやんでえなフヒイトりやん

ああ、全員来てしまった………… 中には済えたはずのラインフォースも……。

「おーいー！ めえー！ 何でこんな所に居るんだ！ ！」

耳元でうるさい声出せないでくれ………… 病み上がりなんだから。

「待て、ヴィータ、流石にそんな口調では言えないだろう」

「もうだよ、ヴィータちゃん」

『………… アギト、今なら』

『ああ…………』

「ねえ君、名前教え」「ニービン・イン」「ヘッ！…………？」

名前なんか教えない、教えてあげない！ 僕の平穀を乱す者には教えてあげない！！

そう思いつつも一時的にぶつ飛ばせたのはあくまでほんの一時。

「あれはまさか融合騎ー！？」

「ラインフォース以外のユニゾンデバイス…………」

ラインフォースが驚き、はやても何か言つてくる。

「今のうちに逃げ…………」

「てやああああああああ……！」

つてまたかヴィータ！？

「くそ！」

ガキン！！

刀を鞘から抜き振り下ろされた槌を防ぐ。

「まさかベルカの騎士だったなんてな」

「アハハハハ、アンタとその武器合ひてないね、幼いって言つか

「ツ！てめえ！」

おお、こんなに簡単にきた。

だけど遅い……。

「いや、アンタの体系じゃあそれを使いこなせないんだよ、幼すぎ
てね」

そう言つとヴィータの首を掴む、もちろん絞める。

「ぐーー！」

そして水月に膝蹴り、デバイスを放した一瞬を狙いデバイスに斬りかかる。

ザンッ！

デバイスを横に真つ一つにして、そのヴィータの首から手を外し腕で締め上げ刀で固定する押さえつけた。

「ヴィータちゃん」

「動くな……」

一括する、その一言で静かになる。

首に固定している刀でヴィータの肌を傷つけ、流血させる。

「全員解除してデバイスをこいつに投げろ」

「な、なんでこんな事をするの?..」

なのはがそう言つた。

「解除しない、女」

だけど無視する、冷徹に……。

「駄目だなのはー!」この二つの言つ事を

「」キ

少し煩いので黙らせる、ついつても首の骨を折ったわけではない。折れてないよね?

「ヴィータちゃん!..」

「黙れ」

なんか自分が悪役になってしまったんだけど…………。
まあ良いよね。

「良いからとっととデバイスを解除して投げろ」

「…………」

全員が解除してデバイスをこっちに投げる。
僕はヴィータを放り投げると相手のデバイスを海に向かって投げる。

「ユニゾン・アウト」

「おう！…逃げるぞ！…オウカ！…」

「のまま逃げる、よし…上手くいく…！」

「…………なんでこんな酷い事を…………」

なのはが最後まで叫んでいる。

「…………そうだ！」

「お前等がそれを言つつか？」

ここまで言つておけばもう僕達には関わらないだろ、原作キャラ以外の魔導師って大した事なさそつだし。

それの大した事無かつた、恐らく転生者が弱くさせているんだと思う。

「もう二度と会わないことを願いな、今度は殺すから」

「何やつてんだよ……管理局の連中と話すなよ……」

あ、ヤバイ。アギトが泣きそうになつてゐる…………。

「ゴメンね、アギト、少し腹がたつたから」

「それならいいんだけどよ……」

取り合えず僕達はこの場から放れて船に乗り込む。

「行き先はランダムで、もちろん虚数空間以外でね」

そつと動き出す船、目の前は光に満ちていた。

桃色の光に

「なんですか」

そのまま船は大破し、海に放り出された。

遺跡とかに迷つたら敵とかと遭遇するよね、嘘?しないって??

「ふは…………はあはあ」

あの後漂流して何とか陸地?にたどり着いた…………。陸地と届つても海の中にある遺跡に入つたら空氣がある程度だつたんだが。まあ海に投げ出された時に追撃とかされたからな、主になのはに……。フエイトは必死に追いかけてきたからな、結界を破壊して海に潜つてやり過ごした。だけどまさか海にまで砲撃するとは……恐ろしい。

なんといつ冷血を…………。

「でも逃げ切れたんだね」

「ケホケホ…………、なんとかなあ」

アギトも無事だつたし、これからのことを考えないと…………。それにしても…………。

「…………何処だ?」

本当にここ何処だよ…………見た事も無い遺跡なんだけど…………もしかしてまだ発見されていない遺跡とか!?!?それなら俺が第一発見者になつて……つて駄目だ。僕戸籍持つてない。これなら不法滞在者になつて罪に問われる…………そんな事はあつてはならない!!

「それはともかく……」

見た事も無い遺跡、謎の場所……コソモジ心を躍らせる物はあるだろ？無い？否、無いであら？…………考古学者じゃなくても探検してみたいと言ひ気持ちがあるだら？何が言いたいって？つまりは……

「探してみるのも一興かな？」

子供心を制御できない訳ではない、これは知識欲だ。たぶん…………。それに何故かこいついう場所は昔から惹かれる。

「よしーじゃあ探検しようか！――」

「…………始まつた遺跡調査、中々楽しそうな始まりだった。

「…………かなり古い遺跡だねえ」

それに見た事も無い物質で構成されていんじ…………それに良いくらいがする。

「でも良く見れば黒とか色々あるな」

「引っかかるなよ」

「分かつてゐつて」

つかこんな分かりやすい物を含めても遺跡に罠があるひとつくらい分かるだらうね、コレ世界の常識。

「まあアニメや漫画とかならいいで黙にかかる人が居るけど……」

一一〇

僕には聞こえなしよ

そう、僕には聞こえなし……。水樹奈々ボイスの少女の声なんか聞こえない！！

そり思いたいけど何故か何かが轉がっていく事がするんだよれ
ん…………」JR駅に近づいてくるような音がするね。

一ノ子山傳

卷之三

こんな厄介事には関わらない方が良い、逃げた方が良いに決まって
いる。

「あ！そこに居たんだ！！」

つて何故か真・ソニックフォームになつてゐるフェイトが居た。
真・ソニックフォームつてSTDじゃなかつたつけ？

僕はバリアジヤケットを着てアギトとゴニゾンし、フェイトに背中を向けて逃げ出す。フェイトはそんな僕を見て追いかけてくる、その後ろにはアニメとかによくある巨大な岩の塊が転がってきていた。

「ちょーーー！」ちくんな！明瞭かにアンタを狙っているからーー。」

「私だけ好きでこんな事をしてるわけじゃない……」

「いや、あんたが眠る」

力チツ

何?今何押したこの子?

「あんた……また」

ビヨン！

最後まで言い切る前に矢が投擲されましたよ。
つてあぶなー！！

やっぱり原作キャラは疫病神だうん！！

「何で眼を押すのかなあ……かなあ……？」

「私だけ好きで押しているわけじゃ……」

「泣いたって許しません……」「絶対……」

本当に何で泣くんだけよ……僕の方が泣きたいよ……

そう……そこ……

「ねえ、何であの辺に攻撃しないの？魔法なら……」

「…………さっきから試してんだが無効化される」

「マジ？……僕も魔法を上手く使えないとみな

つてそれかな？ピンチじゃない……

「どうにかなうこと……？」

「少しだけなら止めは出来るけど……」

「へそ……それじゃあ黙田……」

アレなら壊せるだろ？今の状態じゃあ出す前に死ぬ……つて

もう行き止まり……？

「嘘でしょ……？」

ヤバイ……だいぶ離れられたけどまだ潰せる……。

くそ……

「くそったれ……」

壁を思いっきり殴る、それで壊せるのであれば苦労は無い……。

ただ音が向こう側まで響くだけ…………。Jの壁の向こうに空間がある?

「Jのなりや一か八かの賭けだ!! フェイト・T・ハラオウン! 少しで良いからあれ足止めしろ!」

「え? う、うん」

フェイトが頷き、バルティッシュを転がしていく間に向ける…………。

「すう…………はあ」

落ち着け、アレを出すのには体中が痛くなる…………。まあ今回は命の危険があるからしようがないけど。

理念を捻じ曲げ概念を破戒し理想を夢見現実を逃避…………ありゆる事象を再現し星を田に[与]す。

眩暈がする…………吐き気も今来た。

なんでこんな厨二見たいな台詞を考えないといけないんだよ、ぶつちやけ現実逃避だろ。

太陽に接近し…………繋ぐ。

「ツー! ぐふ」

やば、血が出てきた…………。

体の感覚が無くなっていく感じだ…………体の端から食いちぎられている感じ…………何時まで経っても慣れない。

アクセス完了。

よし、
来たきたあ
！！

ב' ב' ב'

口から大量の血が流れ出る、それと同時に空間が歪み壁に火がつく。火は捻じ曲がり壁を破壊し吸収して大きくなる、それはそのまま向こう側まで開通した。

体中に激痛が走る、そりやそうだよねえ……体の肉片^{ヒトツ}が無くなつていくんだから…………。

「危ない！！」

フロイトが僕を掘込んで走る、という回りの運は階段になっていた
よつだ。

દ્વારા

助かつた

本当にギリギリだった、この時から「は原作キャラ」に感謝くらいはしても良いだろ？

「元はと言えば僕の平穏な日々を壊した管理局の連中が悪いんじゃ

ねえか……」「

「…………何でやつこいつ事を」

「お前等が悪い、ほら、アギトも法えぢやつて…………」

服の中で震えてるアギトを抱きしめる。

フェイトはそれを見て少し心を痛くしたのか辛そうな顔になる。

「…………嫌いなんだね、管理局の事」

「嫌いじゃない、心のそこから関わりたくない、聞きたくない、滅んでしまえば良いと思つ」

これは本心、ぶつちやけ無くなつてしまえば良いとすり吐つひる。

「そんなに言わなくても…………」

「嘘つよ、いくらでも…………。田舎あつて一利なしじゃあ無いけど僕にとっては害の方しかな」

「…………」

「あの実験からやつと逃げられたんだ、クローンとしてじやなく人としての幸せを得たいと思つのは当然じゃない?」

「ツーーまあか…………プロジェクトF・A・T・E!—?」

フェイトが大声を上げる…………そりゃあねえ…………自分の出生に関する物だから見逃すはずがないよな。

「つっても僕は大昔の人間のクローンらしいから」

「でも僕にとつてはどうでも良いことなんだよ……。

「……貴方もスカリエッティの……」

「スカリエッティのせいじゃないよ、あれもクローンだよ。それもアルハザードのね」

「ツーーー?でも、スカリエッティは罪を!—」

フェイトは叫ぶ、そうでもしないと自分が何を目的に行動してきた全てを否定されないからだ。

そんな事はしないし僕にそんな発言力は無い、こんなの戯言、いや

……戯言以下だ。

「それをアンタが言つ?」の世界を滅ぼしかけたのに

「あ……」

「ハ神はやての持つてる夜天の魔道書の守護騎士達もだ、管理局に入局したら罪が償えるとでも?甘つたれるなよ、そんなんで罪が償えるのか?」

そう、二次小説とかではオリ主が守護騎士達は主に命令されてただけで仕方なく魔力を徴収していたとかで罪がなくなるのがあるけど……被害者側から見ればそれは溜まつたもんじゃない、はやてもはやてだ。

自分も罪を被るとか言つてはいるけど犯したのは守護騎士なんだ。

「それに守護騎士は人間じゃない、人間じゃないのに人間の法律で裁くなんて可笑し過ぎる」

「そんな事無い！シグナム達は……」

「悪いけどあなたの意見なんか聞いてない、私から言わせれば貴方も守護騎士達もちゃんと罪を清算してない、ずっと犯した時の人まだ」

きっと自分の目は本当に酷く冷たいんだが、本当はこんな事は言いたくない。

「でも一つだけ言っておくよ、生きている限りは罪を重ね続ける事もできるし清算する事もできる……それに死んだら罪がなくなるわけじゃない、むしろ死んでからが辛いんだ……本当に清算したいなら自分の思いで行動しな、生きているんだ？」

「まあ、アンタは若いんだから地道に考えな。自分自身でね」

「まあ、自分で考えた方が一番良いんだけどね。そう言いながら僕は立ち上がり上を目指す。

「マナさんのようだね」

まあこれは余計な事だったかもしけれどね。

「で、到着つと」

「……」

フロイドはすっかり蝶らなくなつた。

まあ言こすきたのが悪いかもしねない、でもアレベリになら反論の余地はある。

でも、反論した所で何かが変わるわけでもない、これは世界の法則なんだから。

それは反論する事が出来るけど変わらない不变。

「何考えてんだ僕は……」

わつわから近づくしたがい考えが変わつてこぐ。

「…………わつわからメンね、少し言こすきた…………」

「……」

「でもや、お前つて子供でしょ。ならもう少し子供らしく振舞えば良てよ、わつすれば気がつかなかつた物も見えるはずだかられ」

まあ自分の言葉は矛盾だらけだから、そんなに考えない方が良いよ。

「わし…………よつやく着いたわけだけ…………」

皿の邊にあるのは壁画へのような物だった。

山の上に剣と写輪眼の文様と太陽みたいな物を宙に浮かせている大
様な物が画かれていた。

「何コレ？」

まあ変な物には変わりない、取り合えず写真。

「よし、上手く撮れた」

綺麗に撮れた、けどさっきからフェイトが下を俯きっぱなしだよ。
少しくらい元気にしたほうが良いな。

「お前が今何考えているのか分からぬけど、人間か人間じゃない
かなんて些細な違いだよ。それともなに？お前は自分が人間じゃな
いとか思つてるの？」

「違う……」

「そうだな、クローンは人間だ。人と同じで人を愛せるし憎む事が
出来る。それにアンタは綺麗だからさ、クローンだと知つても好き
で居る奴の方が多いんじやないか？まあそれで皆がお前の事を嫌い
になつても僕は好きだぜ、時空管理局員としてのフェイトじゃなく
フェイトと言う一人の存在が。話して楽しかったしね」

あの後何とか出られた…………まああの壁画の横に階段が合つたからそのまま上ってきた。

「うーん、空気が美味しい……。」

アギトは今寝てこます、フロイトは未だ俯いてこます。

「…………じゃあね、もう一度と念わないと困ります」

そう言つて立ち去りつとした、その瞬間バルティッシュ・シュー・鎌バージョンで首を押さえられている。

「な、何を」

「…………すみませんが貴方を時空管理局員として…………いえ、フロイトとして保護します」

あれ? ドウシト! ひなつた?

「な、何で?」

「貴方がさつき言った事です、時空管理局に捕まつたら実験されるかもしねいんですよね?」

「う、多分そうなると思つ」

この体は唯一の成功作品だし性能良いし…………。

「なら時空管理局としてじゃなく、フロイトとして貴方を保護しま

す。大丈夫、ちゃんと世話をするから」

あれ？ 田おかしくない？ 何ていうんだろう…… 要領オーバーでパンクしたと言うような感じだ……。

「あの？ お願いですから逃がしてください？」

「駄目です、私が貴方を守るから」

「ねえこれってスルーしてるよね！ …… 僕の言葉を返してないよね！」

ヤバイ、本当にヤバイ……。
どうにかしてこの場を離れな…… つて、誰だあれ？
弓を構えてこちらを…… あの剣でたしか…… ッ！！？
「危ない……！」

宝具は絶対だと思われがちだが実際はやつではない（前書き）

携帯電話？..じゃあ書もついでした。
そして一応転生者も出せました。

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない

俺は神崎大輝、所謂チート転生者だ。

貰った物はオッドアイで銀髪、ニコポ、高い魔力にエミヤの無限の剣製だ。だが最初は本当に酷かつた、中身の無い空っぽの物しか作れなかつたからな。

だが原作に関わつてからはちゃんと宝具も投影できるようになった。プレシアは救えなかつたけどリインフォースを救えたのは良かつた。おかげさまで原作キャラにも好かれている。

P・T事件はなのはの味方だつた、フェイト側をについた転生者も居たがあそこまで欲望垂れ流しだとは思わなかつた……。

闇の書事件でも転生者はいた。

両方とも牢屋のなかだけどな。

そもそもクロノをKYOUと呼ぶのが理解できない。

まあ色々あつたが俺はオリ主になつた。

なのは達も俺に優しい、普通に話してくれるし一緒に遊んだりもしている。

だけどフェイトは違つた、明らかに男を避けている明らかに他の転生者にクローンだとか言わされて脅されていた。フェイトをハーレムに加えたいけど今ままじゃあ何もできない、幸いフェイトの中で

俺は信頼できる人間らしい。でも今ままじゃあなんの進展もない。
どうにかならないかと思つてたが転機が現れた
明らかに原作じやあ現れない事件が起こつたからだ。
まず間違いなく転生者だろう。

ただ俺はすぐに行けなかつたためなのは達に皆で行けと言つた。

だが逃げられた上相手がアギトを所有していることが分かつた。
俺は急いで地球に戻ることにした、間違いなくそいつもハーレム狙
いだと分かつた。アギトを所有している時点で原作に接点を持とう
としていることが分かる。

そして地球に戻つた瞬間にサー チャーで見つけた、フェイトと知ら
ない奴が一緒に居るのが分かる。

俺はカラドボルグを投影する、だけどこれじやあ威力が高過ぎる…

…。

そう思つた俺はカラドボルグを地面に突き刺し矢を投影する。
弓は無駄無しの弓フェイル・ノートだ、これなら威力も申し分なくなる。

そして弓を構え、放つた。

僕はフェイトを突き飛ばす、その際胸を触つた。柔らかかった……

つて違う！

あのオリ主が弓を構えている、地面にはねじ曲がつて刺すことにして使えないような剣、カラドボルグが刺さっている。

「大輝！？なんでここに！」

フェイトは叫ぶ、どうやら予想外の事らしい。

「シルバーライフ」

ガキンツ！

刀で射られた矢を弾く、力を使うがいなせないほどでもない。

後ろに屈るフェイトの姿を見る、両手を地面につけふせている。
「うやうやしく、フェイトは念話で説得したが断られたらしつまり投降しても意味はない」と、まあ投降しても意味はないさそりだけど……。

「……アギト、起れ!」

指でアギトを小突く、アギトは少し声を唸らせ田を覚ます。

「ん、どうしたんだよオウカ……つてなんだよあれ？」

「分からぬ、まああの攻撃を防ぐから早くヨーゾンして」

「つてあれを防ぐのかよーはあーまあこいや、じゅー

「二ノ丸・ヤン」

まああれを防ぐのはかなり難しいけど防げないわけじゃがない、劇場番の Fate ではキャスターが一時的とはいえて防いでいるのが例だ。

「アマノムラクモ、カートリッジロード

ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ
ヤ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン !

「嘘！？カートリッジを十個も！？」

フェイトが後ろで叫んでいるが気にしない、と言つより構うことが出来ない。

刀を鞘に納めて構える、狙いは一瞬……。

「駄目！逃げて！大輝のあれば本当に危ないから！」

フェイドが逃げても良い許可を出した、けど逃げる暇がない。

それはガートリックチを十個も使ったんだ
今までの行き場を失った魔力は暴走して体を壊す。

「あー、無理

一応フロイトに返事しておく。集中したまま返答を待つ。

「どうして…？」

「今逃げたらあんたが食らうだろ?」

「確かにそうだけど」

「僕嫌なんだよね、傷つくとしつていながら逃げるのは、例え管理局でもね。まあこれは建前だけね」

それに……。

「本当はこんな可愛い女の子を一度で良いから守つてみたいって感じかな?同じクローンとしてじゃなく一人の男としてね」

「ツー?」

さあて、ようやく準備完了だ。これにつけて勝てなければ俺は捕まつて実験漬けの毎日に逆戻り……。
勝てば。

チート野郎が剣を矢にする。

「蛇竜」

鞘から刀を少し抜く。

チート野郎の手が開き矢が放たれる!

「一突ツ!」

鞘から刀を抜き、接近してきたカラドボルグ目掛けて突くッ！

カラドボルグに蛇竜一突が直撃する。魔力を全て一点に集中させる。

普通はカラドボルグなんかとぶつかり合えばこっちが折れる、実際この前のデバイスならば間違いなく折れてたと思う。

ただこの前の刀を取り込んで以来かなり強固になって切れ味も上がっている。

何かのロストロギアかは分からないけど宝具と打ち合える代物になつてゐるらしい。

それに少しだけ角度をずらしていいる為真っ向からぶつかり合つわけじゃない。

それにアギトの魔力に聖王の鎧が体を保護してくれる。だけど相殺するには時間がかかる、その間に第二撃が来る。その前にカラドボルグを破壊する必要がある。

その為にも、もう一つのレアスキルを使うしかない。

「……アクセス開始」

体に走る激痛、肉何かにつまんでは千切られるような痛みが走りる。

「ツ！……アクセス完了！」

その言葉の後に炎が走る、その炎はカラドボルグを包み込み破壊する。視界は炎に呑み込まれ見えなくなつた。

「ぜえ……転移魔法……」

自分が立っている場所に魔方陣が現れる、少し時間がかかるとは言え確実に逃げられる手だ。

「……ま、待つて！」

そう言つて僕の手を掴むフェイト……。

なんで掴むの！？って言いたいけどレアスキルの影響で今はしゃべれない。

そして炎が晴れるとチート野郎が紅い槍を弓で射ろうとしていた。紅い槍と言つてもゲイ・ボルクかどうかすらも分からぬ、流石に視力にも異常が来ていたのかよく見えない。

だけど何故か分かつた、あの槍かが非殺傷設定ではなく、殺傷設定でしかもそれがフェイトに当たると言つ事が……。

それが分かつた瞬間僕はフェイトをだきよせる。

「な、何を」

ザシユツ！

「する……の？」

紅い槍はゲイ・ボルクじゃなく、ゲイ・ジャルグの方だった。

「 ッ！！！」

ゲイ・ジャルグは右肩を容赦なく貫く。

肩に走るのは貫かれた痛み。

体が少しだけ動いたのが幸いだったのか、左手でゲイ・ジャルグを掴み捨てる。ゲイ・ジャルグはその直後に爆発する。

そして右肩から溢れる血液を止めることなく、転移した。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない（前書き）

旅行は楽しかつたです！

ただ外が吹雪いていたけど…………。

そしてベッドで寝ていたら落ちたらしいです。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からぬ

「ぐ、シツ～！」

「動くなよ、包帯を上手く巻けないじゃねえか……」

場所は林、チート野郎から逃げてきて十分、僕は普通の人体型になつたアギトとフェイトに貫かれた右肩に包帯を巻いてもらつている。血はアギトに治癒魔法を使つてもらい止血した、アギト自身は治癒魔法が苦手らしけどこの体は治りが早い為すぐに治つた。だけど右腕を動かすには後二日くらい時間がかかる。

その為にもホテルを借りないといけないのだが……。

「ねえ、フェイト……さん」

「フロイトで良いよ」

「じゃあフロイト、一つ聞きたいんだけど」

「何? 言える事なら話せるけど」

「僕を殺傷設定で攻撃した人の印象を教えて欲しいんだ、フェイトを含めた全員のね」

そう、これが聞きたい。

チート転生者の殆どは原作キャラから好意を寄せられる。全員から好意を寄せられるのが多いけどもしかしたらあまり快く思つていらない奴も居る筈……。

そいつを味方につけられたらい……、まああくまでも最後の手段としてだが。

「なのははとはやて達は多分、ううん……間違いなく好意を持つてる」

予想は出来てたけど女性陣は敵か……。
だけど男性なら

「ユーノやクロノ義兄さんにザフィーラも信頼できる最高の友人つて言つてた」

駄目か……、これは予想外だつたな。

ユーノを淫獣、クロノをＫＹとか言つて毛嫌いしてるかと思つてたけど……。

さつきの事もあるけどフェイトも……。

「私とアルフ、まあ私の使い魔なんだけど……あまり信用してない

……

それは以外だつた、まさかフェイトがあまり信用していないとはね、アルフはそうでもないけど。

「へえ、どうして?」

「……昔私が関わった事件、まあ私のお母さんが起こした事件なんだけど」

つまりP・S事件の最中、もしくはその前後か……。

「続けて」

「うん、私が来たばかりの頃にアルフと一緒に町を歩いていたんだ

「それで？」

「……アルフが血の臭いがするからってその場所に行つてみたら

あ、成る程……分かった。

「人を殺していたと

「うん……」

で、それを言おうにしても証拠が無い。

それに信用されている男が殺人等と言つふざけた事をする筈が無い、
と言われるだけだ。

「まあそれじゃあ信用するなんて無理だわな」

そりやあ無理に決まってるだろ？、殺人を犯した相手を信用しようと
言う方がヤバイ。

一般人がアニメや漫画を見て共感するのとは違い、実際に起きた事
件で私利私欲の為に殺したとなれば信頼なんて失せるに決まっている。

「はあ……、かなりヤバイな……」

このままじゅあ本格的にせばいかう。

「…………ねえ、時空管理局に捕まればなんだよね……」

「へ・まあやうだな

「どうしたんだ? フューティー……」

「ならんく」

僕はこの後フューティーが言った言葉に度肝を抜かれた。

「…………確かに、それなら…………でも…………僕も危険だしフューティーも巻き込むことになる」

「つづん、私達が貴方の事を…………それに殺傷設定で放つた事もあるから…………」

ああ、しようがない…………今はフューティーの話の続きを聞いつけ。

「アギト、嫌かもしれないけどフューティーの話とおつこじよう

……」

「私はロードの話の事に従つだけだ! それこの金髪は信用できる

「!」

「どうやらアギトに気に入られたようだね

アギトが管理局の人間なのに懐くなんて珍しい、でもフュイトは信頼できる。

だからなのかフュイトと一緒にいても嫌な感じはしなくなった。

「……そういえば何で私達の名前を知つてたの？なのはなに女つて

「ああ、アレは脅しやすくなる為に言つただけ…………名前は研究所で」

本当にこういつだけは便利な研究所、その名前を出すだけでフュイトは少し辛そうな顔をする。

まあ本当は前世のテレビで…………そりゃ何時見てたんだっけ？まあコレだけ長い時間が経つていれば忘れるよな。

「じゃあ…………これからよろしく、フュイト」

「うん、よろしくねオウカ」

「フェイトちゃん……大丈夫かなあ？」

なのはが心配している、だが大丈夫だ。……フェイトはあの野郎に放ったカラドボルグの衝撃でぶつ飛んだ筈だ。最後に放ったゲイ・ジアルグ以外は非殺傷設定で放った、アイツの死体が発見できなかつたが直撃した証拠に地面には血があつたからな。

「たぶんな、アイツが非道な事をしていなかつたら大丈夫だ。それにフェイト程強ければ戦いだつて持ち込めるはずだ、その時に魔力を探知できれば」

「うん……そうだよね」

どうやらその転生者はかなり酷い奴らしい、ヴィータを迷い無く気絶させ人質にした。

それにそんなに酷い奴にフェイトは惚れない筈だ、ハーレムを狙つて地球に来たんだろうが惚れるわけ無い、馬鹿な奴だ。

「なのはちゃん、大輝君！－フェイトちゃんからの通信が来たで！」

お、はやてが来た。

それにフェイトからの通信も……どうやらアーティシと一緒に居ないようだ。

「だけどな……暫く戻れそうにならぬわ」

「は？」

俺ははやての口から放たれた言葉に度肝を抜かれる事になる。

「ふう、これでよし」

「でも本当に良いの？ フェイトまで巻き込む事になるけど」

「良いよ、それにあくまでも私の言つことに従つていれば大丈夫だから……」

フェイトが出した条件、それはフェイトの近くに居る事。

そしてあのチート野郎が殺人、もしくは殺人未遂の証拠を掴む為に協力すると言う事、アソシが僕の肩を殺傷設定で攻撃したという事だけではまだ無理らしい。と言つより証拠が上手く取れなかつたらしい。

そして僕を使って証拠を掴むと……、つまり僕は魚釣りの餌ですね分かります。

でもフェイトに協力する代わりに僕とアソシは事実上管理局の預かり扱いになっている。

フェイトの近くに居ないと駄目になるが管理局員が来てもフェイト

に守つてもらえる、まあ持ちつ持たれつの関係になると言う事だ。
だが所詮形だけ……、あのチート転生者が何か言えば原作組みは
僕を襲うだろ？

「でもその服じゃあ……」

「……あー、確かに」

今の服は言つてしまえばかなりボロイ、基本魔力を頼つていたし一
人暮らしだったからこの服しかない。

「……取り合えず服を……」

「お金ならあるけどね」

そう言つて札束を出す、換金していない宝石なども含めればかなり
の額にはなる筈。

「……お金持ち？」

「まあ一応富豪並にはあるけど…………」

「……取り合えず行こう」

そのままフェイトに連れて行かれ服を四着ほど買った、安い服にし
たかったが結構高い服になつた。

そして何故かフェイトの服も……ぶっちゃければフェイトの服の方
が……、一応人間サイズのアギト用の服も買った。

「じゃあ次はご飯にしよう

「……まあ出費がでかかったのはじょりがないよな」

僕の服の出費だつたわけだし、フロイトとアギトは女の子だ。
服は多い方が良いだろ？。

ともかく、よしやく、飯だ。

既に日は暮れ始めているし…………、長く居すきると警察が職務質問
とかしてきそうだからね。
そう思いながら歩き始める。

「ヤレ」のお嬢さんたち

現実で変なおじさんと話しかけられたら逃げる、相手にとって男も女も関係ない

s t s 編をやる方が迷っています…

現実で変なおじさんと話しかけられたら逃げ、相手ひとつて男も女も関係ない

「セー」のお嬢さんたち

いきなり僕達は変なおじさんに話しかけられた。

初老の男性できっちりとした正装、白髪で威風がある髭等が只者ではない雰囲気を出していた。

だけど攻撃的ではない。

「何ですか？」

「占いをやっていかんか？今なら口ハでやつとるやん

「やります」

口ハ、つまり無料、只だ。

やつておこして揃は無い、占いって嘘のは所詮英氣を養ひぬけに行つ物だ。

それに良い気分になる。

「金く……」

「占いつとも乗り気だねフュイト

アギトも面白がっている、女の子大好きだからね~」いつの……
…。フュイトとアギトも立派な女の子だったって言つ事が…… 関

心関心。

……そう思つていたら一人から蹴られた、何か失礼な事を考えたとかいつてた……なんで分かつた？

「ホホホ、元気が良いの。どれ、手を出してみんしゃい」「なるほど手相占いか。信憑性なんて全く無いけど一番知られているメジャーな占いか……。

そう思つてるとフロイトが手を出した、初老の男性はそれを手に取り……

「ホツホツホ、若い娘の肌は良いの」

「真面目にやれ……」

「のむひたさん本当に占い師か？もう変態しか浮かばねえよ。

「スマンスマン、本物せうひたちのが占いに使つモノンじや」

そつ言つておつさんは皿を出し水を入れる、そして何かが入つている袋を出す。

「これを皿の中に入れてみれ、これが占いじゃ」

聞いた事も見た事も無い占いだった、いや……探せばあるかもしないがこんな占いは憑依前でも見たことが無い。

「いなんのが？」

「まあやつはいつの間にかじつや…………」

「おひさん変だ、でも懸念は無い…………まるで子を見守る親のような感じだ。

そう思つていたらフュイトが袋から丸い物を取り一つ入れる……水の色が変わり始める、色は青。

「ほお…………青か…………」

「…………これって色を占うとですよね？青はどんな意味を…………」

フュイトが真剣に聞く、本当に女占うと占いが好きだなあ…………。

「これこれ、急かすんじゃない…………お嬢ちゃんは過去、未来、現在…………どれが良い？」

おひさんがフュイトに質問する、でもなんでその三択なんだ…………。

「私は未来です」

「その理由は？」

「私には一緒に居て楽しい友達がいます、その人たちと一緒に未来を歩みたいからです」

「やつがやつが…………」

おひさんはフュイトの答えを聞いて頷いている。

「『じゅあ占いの結果じゅあ……お嬢ちゃんは死んでしまった姉の
よつなおるの』

「えー?」

このおっさんはフロイトに姉に近い人がいるのを断言した。
何故かは分からぬけれどこのおっさんは少しだけ怖くなつた。

「何で……その事を」

「その様子がひかるとあたつのようにじゅわな

「……はー」

「その死んでしまつた姉はいつでもお主の事を見守つてゐる、と語
つておるの」

「…………もうですか

「幸せになつて欲しことも言つておる、私の分まで幸せになつてと
な」

「…………」

フロイトの田からは涙が零れ落ちていた。

そして確信した、「このおっさんが占い師ではない事に……。

「ねつねん、シャーマン?」

「昔はな、色々と見えるんじゅあ、近い未来とかものも

なるほど、だからか……上いではない予知。

「まあ絶対ではないがのぉ、千回に一回は外れるからのぉ」

そして高確率で成功する事が分かった。

「それじゃつきの続おでのぉ、フュイトよ……皿鳥を持って、たまには素直になつてと皿わしおる」

「はい……せい……」

フュイトが泣く、両の手で顔を抑えながら……泣く。

「次は小さなお嬢ちやんじや」

「ねい……」

そつぱいつアギトは袋から取り出し一つ入れる、色は赤。

「赤か、お主はどれが良い?」

「あたしは過去だ一色々と辛かつたけどオウカと一緒にたからなーーー!」

「ほお、お主はオウカが大好きなんじやな

「ああーーー。」

アギトが嬉しい事を語ってくれる、本当に嬉しい。

「こんな僕を好きと言つてくれれるのもアギトへりこだらわ。

それにしてもフェイトは泣き止まないな……。

「なあ、フェイト……胸へりこは貸すナビ」

「…………ありが、とひ……」

そつ言つてフェイトは僕の胸に顔をつける、そして泣く。色々と溜まっていたのか？原作じやあ闇の書に取り込まれた時に解決したはずなんだけど……。

もしかしてあの野郎が邪魔したとか？全くいらない事を……。

「良い雰囲気じゃが、次はお主の番だぞ」

「あ、ああ」

何時の間にかアギトのは終つていたらしい。

アギトの顔を見ると僕の服を掴んでいる、何を言われたんだ？

そう思いながらも袋から取り出し、水に入れる。色は変わらず透明のままだった。

「ふむ、なるほどのお主はどれじや？」

「僕は…………現在かな」

「何故じや？」

「…………僕は未来はすぐにやつてくるし過去も永久に来る、なら現在

は一瞬しかない……だからです

「やうか……」

おっさんはそのまま優しそうな顔でこっちを見る。

だけど口は何かを躊躇んでいる、言つべきか言わないべきか……。

だけど何かを決心したのか口を開く。

「お主はこゝれ自分の矛盾を見つける、そしてその矛盾が無くなつた時……お主は全てを知る」

おっさんの言葉の意味が分からなかつた、けど将来何かがあると言う事だけは分かつた。

「…………それだけ？」

「いや、むしろ…………お前さん、何か写真のような物を持つてないかい？」

「写真？ そうこやけの前撮つたつけ？」

「あるけど……」

「それを見せてみい」

言われるままに出して見せる。

「…………この写真の場所以外にもこれと同じ物が後三つある、そこに行くと良い」

「その場所つて？」

「この場所以外にも同じ物が？気になるから行って見たいと思つ……
それに何故か知らないけど惹かれる。

「滋賀県にある琵琶湖、北海道にある洞爺湖、そして最後に行く富
士山」

「なるほど……」

確かに言つてみる価値はありますだね。

「でもなんで富士山が最後？」

「セリヒツのある物を持つて行く必要があるからじゃ、詳しく述べ
分からんが夜明けじゃないと意味が無いらしい」

何かあるのか？でもまあ行つてみる価値はありますだな。

「わづか…………じゃあ行つてみるよ」

「ホツホツホ、氣をつけてなあ」

取り合えず行く前に食事を取らないと。
そつまつて一人を一緒に連れて行く…………そうだ

「おっさんも一緒に」

後ろを振り向いた時、既におっさんは居なかつた。

女の会話（前書き）

今回も厨二に「都合主義」。
できれば主人公を不幸にしたい！

次回は外伝やります。

「…………なんだつたんだあのおっさん」

その後探したけど結局見つからなかつた、でも何で急に消えたんだろうか…………？

転移魔法は…………違う、それにあれば時間がかかる。レアスキル…………多分それだと思う。魔力は多分無かつたと思う。
まあいいか…………、不思議なおつたんだつたけど悪い感じはしなかつたし…………。

「それよつも…………」

ぐ～、と腹の音が鳴る。やつぱり今日は朝しか食つてない…………。
「何を食べようか…………」

出来れば魚料理じゃないものを食べたい、肉とか野菜とか…………。
ぶつちやけ中華を食べたい、だけどここはレストラン…………。
事でフュイトに食べるお店を選ぶ権利を譲りひとつ想つ。

「ねえフュイト、何が食べたい？」

「私はいいよ、オウカが選びなよ」

「いや、JJIJはフロイトが……」

「いや、JJIJはオウカが……」

お互に譲り合つ、でもフロイトが良いと言つたから選まつかな。

「なあオウカ、フロイト……」

そつ思つていたらアギトが僕の服の裾を引っ張つて声を上げている。

「どうしたのアギト」

「私あが食べたい……」

そつ言つてアギトが指差すのは日本の文化、そして外国にも知れ渡る由緒正しいジャパニーズフード寿司。
どうやら僕は今日も魚料理以外を食べられないようですが、くそ……
こうなりややけ食いだ！！

そう心の中で呴きながらお店に入った、お店の中は一般的な回転寿司。

行列は無かつたが混んでいた為十分くらい時間がかかるらしい、席が空くまで椅子に座る事になる。

その間にフロイトと少し話をしよう。

「そういうフロイトってかなり綺麗だね、それに可愛いし

「…………か、可愛い？」

少しだけ、顔を赤くした。

まあ素直に褒めているからね、僕は鈍感でもないしそれ位の事は分

かる。

「きつともてるんだらうね」

「……大変だよ、もてるのって」

フェイトが何か色々と諦めたような顔をする……。

「な、何があつたの？」

「変にイケメンな人とか女顔の人に毎日のように『俺の物にならな
いか?』とか言つてくるし……しかも凄い大声で『嫁キター!』
とか言うんだよ、街中で」

「うわあ……」

そりゃあ酷い……というより現実に居たんだな、そんな痛い奴……。

「嫁キター……」

…………実際に居た、そして今僕の目の前で起きたよ。今明らかにこ
っちを見て変な大声をあげる物凄い残念なイケメンの男がこっちに
近づいてくる。

フェイトの顔が青ざめている、アギトもなんか汚物を見るような目
でその男を見ている。

周りのお客さんも何事かと男を見ている、男は顔を赤らめてこっち
に、正確にはフェイトを見ている。

「本当に居たんだね、半信半疑だつたけど……」

「……うん」

フェイドが嫌そうな顔をしている、と言いつゝは変な物を見る目で見ている。

「フェイド、あれ殴つて良い？」

フェイドが可哀想になつたから、本心は目障りだから殴りたい。そして視界に一度と入れたくない。

「……」

無言のままだ、それだけ嫌なんだろ？
そう思い立ち上がりその男の前に立つ、僕より頭一つ大きい男はフェイドに近寄る？とするが僕が遮る。

「おい、邪魔ツ！？」

最後まで言わせることなく水月に拳を入れる、男は腹を押さえながら僕の肩を掴む。

力も全く無い、鍛えてなかつたんだろう。

「て、てめえ……！」

「うぬわー」

次は金的。

「あひい！？」

「もう眠れ」

そして最後に顎にアッパーを決める。
男はそのまま倒れる。

僕はその男の足を掴み外に出て辺りを見回す。
そしてある人を見つけその人の所に行く。

「あの～、すみません」

「あらあ～？ 何かしらボクウ～」

服の色がくどく文物で、不自然な金色の長髪に化粧しているが目立つ
つ顎鬚の男性。
つまりオカマに話しかけた。

「この人が貴方に惚れたとか言っていたので」

「アラア～！ 嬉しいわねえ～」

「それで目が覚めたら貴方と言えない事をしたいと言つていました、
目が覚めたらで良いですが」

「本当なのあ～！」

「ええ、ですから預かってください～！」

「分かったわ～、貴方もど～う？」

「僕は遠慮しておきまasy」

そう言つて立ち去り、すし屋に戻る。

そして何事も無かつたかのようこのフェイの隣に座る。

「……大丈夫だつた？」

「うん、ああ言うのを制御できそうな人に渡してきたから」

『な！誰だアンタ！？』

『あー、照れちやつて可愛いわねえ～』

『ମୁଁ କାହାରେ ଦେଖିଲା ତାଙ୍କୁ କାହାରେ ଦେଖିଲା ଏହାରେ କାହାରେ ଦେଖିଲା ।』

四

外からさつきの男の声とオカマの絶叫が響いた。

「…………大丈夫だから」

「絶対に大丈夫じゃないと思う」

フェイトは優しいなあ、アンナ奴を心配するなんて……。つかお店

の中で大声あげる？普通。つとそだそだ。

「フロイト、これちつきの奴が持つてた物

そつぱひへーつの石を渡す、その石は綺麗に光る石だつた。

「ツーーこれひでトバ」

「しー.....」

「（）せん.....デバイスだ.....なんで持つてたんだろひ」

「分からないけどフロイトに渡した方が良いこと思つて持つてきておいた」

「うそ.....だけどなんで管理外世界にデバイスが.....」

それは恐らく転生者だからです、すみません。

同じ転生者として恥ずかしこ.....、一步間違えば僕もあんな風に

.....。

「まあ良つけじゃ、席空こたみたこだよ」

「あ、うそ」

そつぱひへフロイトとやアギトと一緒に立上がり

場所はカウンターで三席空いている、そしてその席に座る。順番は右からアギト、僕、フロイトだ。

そして会話をしながら寿司を取つて食べていく、焼き魚や刺身とは違つた美味しさを楽しめた。

そのまま時間をかけたいらげ、そのままお金を置き世話を出る。

その時に白目を向いていたさつきの男がオカマに何処かに連れて行かれていただけ無視した、もちろんフロイトやアギトには見せないよつこした。あれは刺激が強すぎる。

「で、寝る場所何処にする？旅館？ホテル？野宿？」

「何で野宿も……」

「まあこれは最後の手段だから気にしなくて良いよ

「…………じゃあホテルで」

「了解、でもどうするの？男と女じやあ同じ部屋を借りるのはちよつと……」「…………」

流石にホテルの部屋を子供が一つ借りるのはちよつと気が引ける。まあ僕は野宿でも構わないけど。

「ううん、部屋は一緒に借りるよ

は？

「何で？僕男だよ、女顔でも男だよ。それに体格だって良いし……」

「オウカがそんなことしない人だって信じてるから

いや、僕は貴方が思つほど綺麗な人間じやあありません。

「だからって……」

「それにアギトも居るし」

「大丈夫だぜー。オウカは信頼できるからなーー。」

「いやでも……男と女とか……」

「じゃあ行こう」

「話を聞いて」

結局僕の話は聞かれる」となくそのままホテルで一緒に部屋で泊まる事になった。

「全く、こんなのがいやあの都合主義だ」

お風呂に響くのは嘘…………。

ビジネスホテルにある風呂を使っている、お湯の温かさが体に染み渡る。

「…………髪長いな…………」

何年も切つていなかつたらこうなるか…………、短くしようとつ…………前世のよつて、つて前世はどうんな髪形してたんだつけ。

まあ何年もたてば忘れるよね普通。

『……で、何で一緒にホテルにしたんだ?』

外からアギトの声が小さいが聞こえる。
少し静かにして聞く、アギトはあんな姿をして子供っぽいがこの体
よりも長く生きている。
もしかしたらフェイトよりも年上かもしれない。

『…………なんていうのかな?』の人はそんな事ないと思つたんだ』

信頼してくれるのは本当に嬉しいけど僕は貴方が思うほど優しい人
間じゃない。

『でもさあ、オウカが言つてたけど男と女だよ、それに性格少し変
だし』

否定はしないけどアギトが裏で僕の事をどう思つているのか分かつ
た、否定はしないけど。

『まあ確かに性格変だし容赦ないけど…………』

酷い!…出会つてから一日も経つてないのにそんな評価をするなん
て!!

『…………嫌な感じがしなかつたんだ』

『嫌な感じ?』

『うん、さつきの男の人人が良い例だけど…………大輝が殺人をした所
を見た後に逃げ出したんだよね』

今フェイトの昔話を聞いている、と言つより何でこんな重い話に？

『その後魔導師に会つたんだよね、何人ものね。その全てが協力してやるとか言つて……嫌な感じがしたんだよね……私を物のよう見ているとか……そんな目で』

また転生者が……つーか馬鹿ばつかだなあい…………。

『しかも全員が戦いだし……アルフと一緒に逃げて……なのはと会つたんだ、その時も大輝と会つて分かつたんだ、酷い目をしているつて』

『そりゃ…………』

『それで大輝とだけは距離をとつてるんだよね、だけどたまにカッコいいなと思っちゃう時がある…………』

大輝はニコポ、もしくはナデポを持っている。
だけどフェイトはそれを自分の思いだけで跳ね除けてるんだ。
ニコポやナデポは誰だらうと惚れさせる能力だと思っているけどそれは違う、主人公に憎しみを持ったまま死ぬ敵キャラも居るよう一心で決まる。

言つてしまえば心の持ちようでは耐えられる、だけど大半が気付くことなく墮とされる。

フェイトはそれに無自覚ながらも気付き耐えている、凄いと思う。

『だけどね、その度に思つんだ……なんで人を殺したのつて……』

……』

『そりが…………』

好意を持つていても失望する、フェイトが墮ちないわけだ。

『それに自分が自分じゃなくなる感じが嫌だった、そして許せなかつた…………なのは達には表面だけよく見せて隠れて酷い事をしている大輝が…………』

どれだけ表側を良くしたって所詮は偽りの物だ……いつか剥がれ落ちる。

たとえ酷くても本性を出しておけば良かつたんだ、あの野郎の力なら不条理を変えることも出来る能力がある、フェイトも裏切ることは無かつたのに。

『まあその点オウカは隠すのが下手だしな、すぐに顔に出るし』

『え、そんなに出てたの？僕つて…………』

『うん、ユーノや義兄さんのように嫌な感じはしなかつたからね
いや、だから僕は…………』

『それに一緒に話していく楽しかった、言葉は色々と矛盾してたけどね』

『そりだな、ハハハ』

「僕つて…………僕つて…………」

僕は周りの人からヘタレとでも思われているのかなあ…………。

P.V五万達成 小学校（前書き）

本当は三万の予定でした。
でも書いてる途中に……そして短いし意味不明です。
それでも良かつたら見てやってください。

あー、暇だ……。

僕こと高町オウカは転生者だ、正確には憑依者が合ってるけど。
一応リリカルなのはの世界、僕のほかにも転生者は居るけど……。
全員チート能力もちなんだよね……。

高町の姓を名乗っているけど実は養子、理由は実験が嫌になつて逃げ出したらフェイトに助けてもらつたこと。

本当はハラオウン姓になる筈だつたんだけど高町親子に引き取られた、なのはが弟欲しいとか言つていたからとか……。
僕つて弟？

まあチート転生者でオリ主である神崎大輝には絶賛睨まれ中です。
ヤバイです、朝っぱらから僕の胃袋が破れそうです。そうなつたら
胃液が肉にかかるて痛そうだなあ……。

そんなこと考へてたらフェイトが近寄ってきた。

「お早う、オウカ！」

「お早う、フェイト」

フェイトが笑顔で僕に挨拶する、僕もフェイトに挨拶する。
にしても本当に可愛い笑顔だなあ……。

「席に着いて下さご、HRを始めますよ」

先生の命令で生徒が席に座る。

いつして、今日も一日の生活が始まる。

「俺と戦え！高町オウカ！！」

あれ？ビックリになつた？

今は体育の時間、何をしていると思います？

ドッジボールです、はい。それでフェイトに応援されました。

あ、理由分かつた。

「えー！…嫌だあ！…」

まあこじははす供っぽく……。

「どうせ僕が勝つもん」

「…大輝、お前に味方しよう」「…

あれ？何で？手っ取り早く済ませうと思つたの……

「いや、今の言葉が原因だからね

あ、また口が滑ったのか……。

はあ、面倒くさい……海に潜りたい……。

「それじゃあ試合開始！」

ああ、先生！お願いですから試合だけは……

「はあ……なんでだろ？」「

「くそ……くそ……」

向こうのチームが僕にしか狙わなかつた為こっちのチームの被害は少ない、それに対し大輝のチームは大輝一人しか残つてない。

向こうは転生者と言えど体はただの人間、でもこっちはクローン……しかも生まれる前から強化されている。

やつぱり基本性能の差つて大きいよね、戦い方以前に。

「じゃあこれでお仕舞い

やつぱり投げる……。

これでやっと終われる。

はつ？今何言いやがった？
しかもキヤツチ…………、あんにゅるい…………チート能力使いやがった
な……。

「はつー勝負はまだこれからだぜーーー！」

そつまつてあの馬鹿がボールを投げる、それをかわす。

「ヒッー！ー！

「ヒッ…………」

後ろの少年がぶつ飛ばされる、ちよつと待て…………ボールにも強化
してんのーーー？

「おい…………」

「お前には勝つ、それだけだ」

本当にこいつオリ主？

なのは達も少し驚いているぞ…………。

「がんばってーーー！ オウカーーー！」

フュイトが僕を応援してくれるのは嬉しいけど…………。

「まあ勝ちに行くか…………」

少し卑怯だけど。

「来い、次お前が投げた時が……最後だ」

かつこつけてるな……。

「まあ良いか」

い。
そつ言つてボールを投げる、ボールはさつき投げた速さより少し遅

「馬鹿か？何で少し遅く……」

そしてボールは大輝の手に收まる…………瞬間に落花した。

「なつ！？」

落花したボールはそのまま大輝の足にぶつかり地面に落ちる。少しの間周りが静かになるがすぐに歓声になる。

「すげー！－！ チェンジアッピஜやねえか今の！－！」

一 僕達の勝利だぜ！！」

「あの輝に勝ったんだ！！」

周りが喜んでるけど、向こうは

「やつぱり大輝じやだめだよなあ」

「性格やルックスは勝ってるのになあ

「なんでフロイトさんはあんな奴に」

「くそ！…何で負けたんだ！…」

結局いつもなると……、なんか勝つた気がしない。

「はあー……今日もめんどくさかった」

「もう言わないでよ」

放課後になつて掃除しフロイトと一緒に帰る、何も変哲の無い一日々。

「フロイトも俺より大輝の方が良いんじやない？」

ふいにこんな事を言つてみた。

「……大輝は何か変」

「何か言つた？」

「何も言つて無いよ

「…………なんだ夢か」

目が覚めると、いつもの岩肌が見えた。

「もしも僕が原作キャラに会っていたら…………まああくまで可能性
か」

それよりも先に殺されてたと想つ。

「おーい！一 起きたかオウカ！！

「うん、起きたよ」

そうだ、あんなのは夢だ。

僕が原作キャラに会えるわけ無い、今おうとしているが殺されるだろう
が…………。

まあ向こうから来ない限りは……。

それから数日後、僕は原作キャラと転生者に会いつらになるの
だが……。

旅に必要な物は移動手段と追跡者、追跡者は要らなくない？

「ふつーふつー！」

いやー、朝から素振りって言つのは良いね！体を動かす事は本当に楽しい、できれば海に潜りたいけどここに海は無い……残念だなあ。

まあ良いか、すつきりしたし。

「戻るか」

そう言ひてビジネスホテルに戻る、その時に昨日居た転生者に会つた。体中にキスマーケが付いていて死んだような顔をしてこの世の終わりのような顔をしていた。

しかも服が所々破れていたり変な液体が付いていたけど……。

うん、何があつたんだろう。

でも僕のせいじゃainいよね、うん。

そんなことを考えていたら何時の間にか自分の部屋の前に来ていた、テンプレならここで着替えていると言つ感じだけど……そんなことはあり得ない！！

「……ただいまー」

扉を開けると布団に入つて何かを見ているフェイトが、……。

「あーう、うんお帰りオウカ……」

フェイトは見ていた物を隠しごつちを見た、明らかに動搖していた。

「何を見ていたの？」

そう言つてフェイトに近づく、それに反応してかフェイトが後ずさりをする。

「べ、別に何も」

「あ、胸の谷間が見える」

「嘘!?」

ふ、引っ掛けたな。

フェイトが右腕で胸を隠してゐる隙に左腕に持つてた物を見る。

「だ、騙した!?!?」

「騙される方が悪い、とは言わないけど」

そう言いフェイトが見ていた物を見る、それは写真だった。
写つっていたのは十人程度の科学者…………つて……。

「これまだあつたんだ」

「これは一番最初の頃の……僕が作られた一番最初の頃の科学者達だ。

「この頃はまだ酷い実験じやあ無かつたな……それに人間扱いだつたし」

「……ああ……」

何時の間にか居たアギトも頷いていた、この頃はまだ楽しかった。

「……オウカ……この写真の人たちは……」

「ああ、僕を作った科学者達だよ……今じゃあ一人しか生きてないと思つけど」

「……昨日言つていたマナさんってこの人?」

フェイドが指差すのは一人の女性、綺麗な薄紫色の髪に橙色の瞳、目は鋭いが写真でも伝わる優しそうな雰囲気がある女性。

「……そうだよ、マナ・リルクライト……僕を作り出した研究の第一人者……そして僕のお姉さんだった人」

「……本当に優しかったな……私もこの人に助けられたんだ」

この時はあくまでも作る事だけだった、聖王を復元して……ちゃんとした大人に育てるという感じだった。

「うん、作られてから一年間は本当に楽しかった……あの事件が起きる前は

「あの事件……？」

「…………聞きたい？」

「…………うん」

「そつか、じやあ…………次回に続く」

「何でー?」

「この話はあんまり言いたくない、同情されるのが嫌なのもあるけど絶対に止められるから…………。

本當ならずつとここに住んでいる予定だつたけど…………管理局預かりになつたから関わらないといけないのか、僕がフェイトにスカリエッティの事を被害者とか言ってスカリエッティに恨みが…………無くなつた?わけじやあ無いかもしけないけど…………まあ結局僕がフェイトに言ひうる資格は無かつただけだ。

「…………それよりも

そつかて買つててきたサンドイッチと牛乳を渡す。

「朝、ご飯だよ

朝食を食べ終わった後ビジネスホテルから出て街を歩いていた。正確には歩いて隣町に移動するのだが……。

またあの転生者に出会った、だけどもう一度と使い物にならないだろつ……あのオカマと一緒に手をつないで歩いていたし、何か目が真っ白い粉を使ってる人みたいに逝っちゃった目で笑っていたからな……。

「えへ、ヒへへへへ……」

顔を出来るだけ会わせない様に歩いてその場から100mくらい離れたらフェイトが口を開いた。

「何で昨日絶叫が聞こえたのか分かつたよ」

いや、僕には分からない……チート能力があるのに何で魔法を使えない一般人に負けたんだろう……。
デバイスが無くても能力が……そういう二コポやナデポって男にも効くんだっけ?
効いたらいいやだな……。
つて……

「…………フェイト、少し走るよ……」

「え?」

僕はフェイトの手を引っ張り人通りの多い道に行く……。

「一体どうした」

「管理局の白い悪魔、キング・オブ・テーマン事高町なのはに管理局の若理事八神はやてが居た」

「……その二人の名称についてどうかと…………」

「でも結構呼ばれてるよ、科学者達も言つてたし」

フェイントは僕が今言つた言葉に苦笑いする。

「でもなんで人通りの多い道に?」

「理由は二つ、人通りの少ない道に行けば見つかる可能性が高いから」

人通りの少ない道って人が少ないので分かりやすいし、行き止まりがあつたりする。

そうなると即戦闘勃発、僕はあの一人なら戦つて勝てる自信があるけど……。

「それに管理局のオーリーシュ、妬ましいぞこのハーレム野郎事神崎大輝も居たし……」

「……一応聞くけどその異名つてオウカが考えた事じゃないよね……」

「いや、マジで僕じゃない……フェイントにも異名が」

「聞きたくない」

「だよね」

「まあもつ一つの理由は木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中つて言うわけ」

「まあこじんだけ多ければ分からぬだらう、小説や漫画なら分かるだらうけど……。」

「でも少しくらいこは変装した方が良いかなあ？」

僕はそう言つと足でこの場から立ち去る。

その後見つかる事も無く何とかバレずに隣町に行く事が出来た。

「…………疲れた…………」

本当に疲れた、周囲を警戒しながらここに来るのには本当に神経使つたし何より遠かつた。
他の移動手段があれば…………。

「あ、これ良いな」

目に止まつた物は自転車だった、何故か惹かれる……訳じやないけど何故か欲しい。

それにデバイスの中に収納できるし…………うん、これ買おう。

「すみません」

そう言ってからお店の中に入った。

「いやー、楽だねー！歩く必要ないし頑丈だし」

「かなり高いのを買つたからだと想つんだけど……」

フェイトが僕の買ったもう一つの自転車に乗つてゐる。アギトは小さくななりフェイトの服に入つてゐる。

そして何故か寝息まで聞こえる、アギトってあんな性格してこるのによく寝るんだよなあ。

「わひと…………、」そこから一番近いのが、琵琶湖だったよな

ポケットから取り出すのは//ズのよひに汚い字で書かれたメモ。

「じゃあ行くよ、フェイト

「うん、分かった」

今思えばたつた一日の出来事だった、たつた一日で原作キャラに会い神崎大輝と戦つて……本当に何でこうなつてしまつたんだろう。

「あ、道逆だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299ba/>

テンプレート？夢のまた夢だよ

2012年1月8日19時54分発行